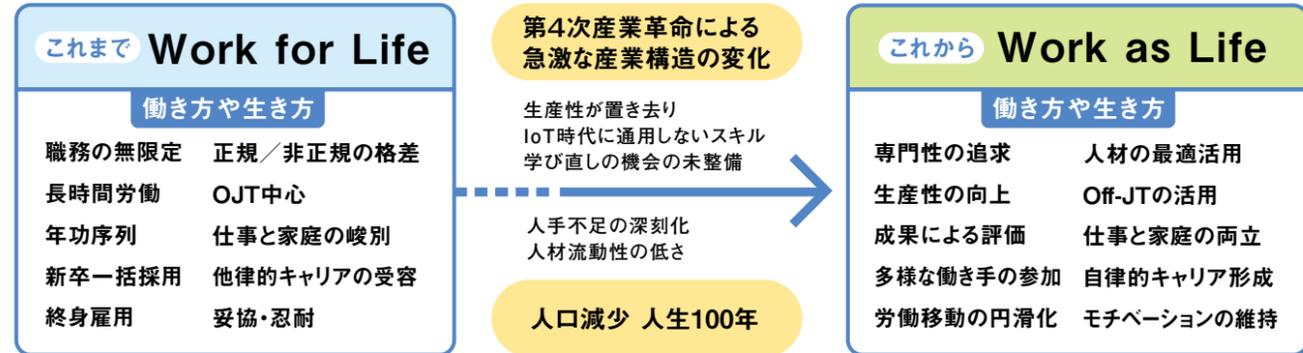
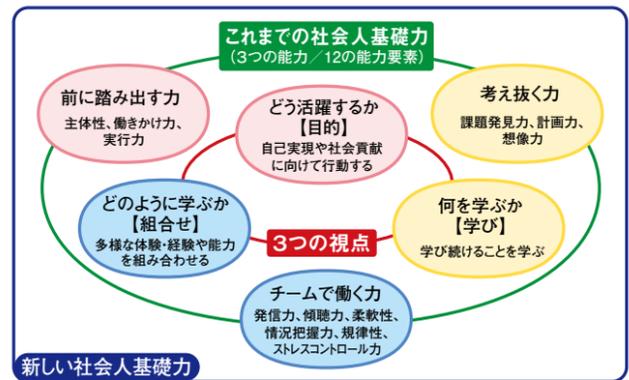


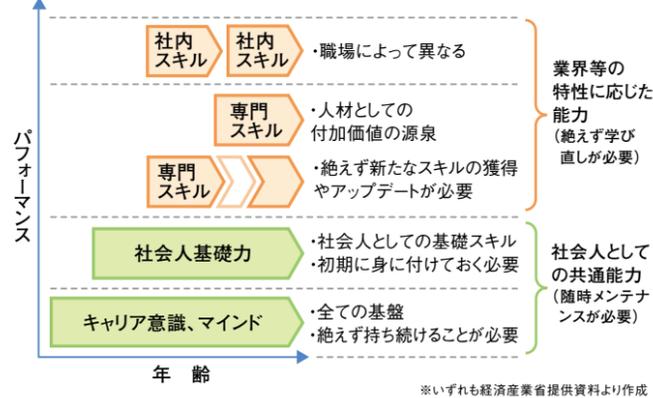
近年の働き方や生き方の変化



「人生100年時代の社会人基礎力」のイメージ



学びながら働く ～人生100年時代のキャリア



問題提起

「人生100年時代」に求められる力と大学への期待

産業構造の転換や人口減はどんな未来をもたらすし、必要な人材要件はどう変わるのか。「主体性等」の評価・育成の前提となる、環境変化と大学の役割について、産業人材政策を担う経済産業省の担当官に聞く。

動きながら、学びながら
新たな価値を探る時代へ

私たちの働き方や生き方は今、変化の真っ只中にあります。主要な要因の一つは、第4次産業革命。AIやIoTの発展により、個々のニーズに合わせた、創造的、革新的な製品、サービスが創出できる社会になりつつあります。目標を定めて綿密に工程を練り、計画的に仕事に当たる「ウォークターフォール型」のビジネスモデルはもはや過去のもの。これからはアイデアを形にせず世に問い、使いながら改善していく「アジャイル型」が主流になるでしょう。頭でっかちにならずとにかく手を動かしてみる、というタイプの人材を育てる必要性を感じています。もう一つの大きな要因は、人口



経済産業省 経済産業政策局 産業人材政策室 室長補佐 橋本賢二

はしもとけんじ ●2007年人事院に入職、2015年から経済産業省に出向し、第4次産業革命や、教育改革の動きを踏まえながら、産業界の成長に資する人材育成施策を担当。

取材・文/見山雄介 撮影/坂井公秋

「あなたは、どう生きていきたいですか」 その答えは、行動履歴の中にある

構造の変化です。日本の人口は確実に減少します。社会を維持するには、生産性を高めなければなりません。実は、日本の生産性を下げている大きな理由の一つは、働いている人の*エンゲージメントが低いこと。自分が社会にどのよう貢献するかが明確になっておらず、楽しく働いていないのです。同時に、多くの人が100歳前後まで生きる人生100年時代も目の前です。これまで通り「60歳で定年」では社会が立ち行かません。高齢者も社会とリンクし、価値を提供し続けることが当たり前になります。数年で圧倒的に変化

「行動」を通して築く 主体的・自律的なキャリア

これまでの社会では、人材を評価する基準は、資格、学歴やスキル、リテラシーなども含む、広い意味での「知識」でした。しかし、未来が不確実で、創造性を発揮して何ができるのかを考えなければいけない時代に、知識以上に求められるのは「行動」と、行動を通

なキャリアを実践の中で築いていく「キャリアオーナーシップ」が求められ、また評価されるようになることを考えています。これら3つの視点は相互に補完し合うイメージです。目的がわからなければとありえず学んだり、誰かと協働したりすればいい。3つの視点のどれか1つに注目すれば、他の2つが見えてくるはず。実際に企業では、新しい採用のしくみが始まっています。求職者がそれまでの行動履歴(ポートフォリオ)を公開し、それを評価した企業がオファーを出す。行動の意図や内容、姿勢が、目的意識やコンピテンシーを推し量る要素になると企業は考えているのです。

「行動」の積み重ねを評価し さらに大きく育てる場に

「行動」は「知識」のように、短期間でもがんばれば身に付くというものではなく、積み重ねと振り返りが重要です。例えば中学校で体験したことをその場で振り返ると高校で振り返るとでは、振り返りのレベルも、感じることも違います。進んで行動し、定期的なその履歴を振り返ることで、自分に足りないものを、自分のありたい姿が見えてくるでしょう。大学にはこうした行動・振り返

して得られる目的意識やコンピテンシーだと思っています。さらに、産業構造や就業構造の変化と人生100年時代を迎えつつある中で、学び続けることの重要性が高まっています。そこで、経済産業省では約10年前に提唱した「社会人基礎力」を見直しています。これまで以上に長くなる個人の企業・組織・社会との関わりの中で、ライフステージの各段階で活躍するために、自分がどう活躍するのか、そのために何を、どのように学ぶのか―すなわち、目的・学び・組み合わせの3つの視点で、自律的

りを小学校からステップで積み重ねてきた人を受け入れ、社会へと橋渡しする役割を期待しています。まずは大学入試を新しい時代に対応させることで高校までの教育課程に変化を促してもらいたい。それには受験生がどんな行動をして何を得てきたのか、積み重ねを評価するしくみを構築することが求められるでしょう。そして入学後は、行動と振り返りの機会を多数提供して、学びが何と結びついているのか、その先にどういう世界が広がっているのかを考えさせることができれば、学生が将来を描きやすくなるのではないのでしょうか。さらに学内の人材だけで育てるのではなく、産学連携、地域連携などを積極的に、多様な人を巻き込むことが、学生の目的意識やコンピテンシーの育成につながると思います。

入試や就職活動にとどまらず、学校でも社会でも、体験は、未来を考えるためのリソースとしてより重要な意味を持つことになりました。未来が不透明な中でも、学修履歴や行動履歴が可視化されていけば、どこに進むべきなのかが見えやすくなるでしょう。「どう生きていきたいか」を探るため、生徒・学生も私たちも、行動と振り返りを積み重ねる必要があります。

*個人と組織の成長が連動し、互いに影響し合える関係